

昭和萬葉集

卷四

昭和十二年～十四年

講談社

昭和萬葉集 卷四

定価 一、六〇〇円

昭和五十四年八月二十八日 第一刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二

郵便番号 一一二

電話 東京〇三九四五一一二二(大代表)

振替 東京八一三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

用紙 本州製紙株式会社

王子製紙株式会社

製函 株式会社岡山紙器所

©講談社 一九七九年 Printed in Japan



0392-441045-2253(0) (昭萬)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

昭和萬葉集 卷四／目次

口絵
凡例

I

大陸の戦火

北支の銃声

10

排日の嵐

12

上海・杭州戦線

12

南京陥落

15

徐州会戦

17

張鼓峰事件

17

武漢攻略

18

山西戦線

21

ノモンハン事件

22

欧州の戦雲

25

宣戦なき戦

海をこえて

28

敵陣に対す

29

塹壕にて

31

銃撃・砲撃

32

敵弾

34

敵前渡河

36

工兵

37

突撃

37

戦場にて

39

夜戦

42

前進

44

敵兵

47

遺棄死体

49

捕虜

51

歩哨

52

困苦欠乏

53

戦場の夜

55

空の勇士

57

軍艦旗の下に

59

馬と兵

60

生と死のはざま

戦死

62

戦傷・戦病

65

軍病院にて	67
従軍看護婦	70
戦陣小閑	71
兵の素顔	74

戦場の民	76
望郷	78
戦野の四季	81
後方で	84

II

戦場へ

赤紙来る	86
出で征つ日	89
夫・子を送る	91
弟を送る	93
兄を送る	94
友を送る	95
人を送る	98
出征風景	100
歓呼の声	102
老兵	105
出征兵の周辺	107
馬も召されて	109
出勤	112
戦場を思う	

荣誉の行方

夫を思う	115
子を思う	116
兄・弟を思う	117
友を思う	118
千人針	119
慰問袋	121
戦地からの便り	123
映画・ニュース	126
ラジオ・新聞	128
戦場への思い	130
荣誉の行方	
戦死の報	132
英霊還る	135
白衣の勇士	140
帰還兵	142
戦死者の周辺	145

ぜいたくは敵だ

燈火管制 150

防空訓練 152

軍事教練 153

非常時下の子ら 154

銃後の覚悟 156

戦時インフレ 157

統制経済 158

株・相場 161

金属供出 162

戦時色漂う 163

口を噤む 167

生活の周辺

わびしいくらし 168

職を求めて 170

日常断章 171

青春 173

生活の周辺 175

東亜の同胞 178

大陸へ 179

神風号 180

ヘレン・ケラー 182

ひそかな抵抗

軍部への怒り 183

不安 184

政治への不信 186

世を憂う 187

獄中の歌 190

河上肇博士 191

仕事の歌

工場にて 192

工場の周辺 196

仕事の歌 197

炭坑・鉾山 204

警察官 205

教師の歌 205

商い 209

軍需工場へ 210

給料

211

農村の日々

農民のうた

213

米作り

217

養蚕

220

耕馬

220

農村を思う

221

IV

愛と死

母と父

224

父母を偲ぶ

226

夫・妻

228

妻の死

230

わが子

231

子の死

233

兄弟・姉妹

236

病み臥して

ハンセン氏病

242

病み臥して

247

子の病

251

V

四季のうつろい

春

254

夏

260

秋

263

冬

266

歳暮・新年

269

山・湖

270

海

274

鳥

275

馬

276

くさくさの歌

街角で 277

神社仏閣 281

大陸風景 283

くさくさの歌

285

折々の歌

身辺雑詠

折々の歌

287 290

戦地詠における人間的な声 〈昭和短歌史概論〉

296

小植物学者の戦き 〈昭和史私論〉——山田宗睦

302

年表

312

作者略歴・索引

315

脚注目次

〈大陸の戦火〉

武漢攻略作戦

19

大陸の戦火

「国民政府を相手とせず」

20

蘆溝橋事件

近衛文磨

21

日中戦争開始

「東亜新秩序」 声明

22

通州事件

ノモンハン事件

24

上海・杭州戦線

ドイツ軍のポーランド進撃

26

南京攻略

第二次世界大戦

26

徐州作戦

日独伊三国同盟問題

27

張鼓峰事件

〈宣戦なき戦〉

27

兵力の動員

28

抗日統一戦線

29

蒋介石

30

国際連盟の日本非難

31

関東軍

32

八路軍

33

華北戦線

34

汪兆銘の重慶脱出

35

華中戦線

37

バイアス湾上陸作戦

38

華南戦線

38

黄河決潰

41

『支那事变歌集・読売新聞社版』

42

『支那事变歌集・戦地篇』

43

『支那事变歌集・アララギ年刊歌集別篇』

44

『渡辺直己歌集』

46

遺棄死体	49
捕虜の処遇	51
航空兵力	58
沿岸封鎖作戦	60
《生と死のはざまで》	
戦死	63
傷病兵扶助	67
軍病院	69
従軍看護婦	70
慰安婦	84
《戦場へ》	
赤紙	87
出征行軍	90
『支那事变歌集・銃後篇』	92
少年航空兵	98
歓送歌	103
軍用列車	113
《戦場を思う》	
軍事郵便	116
「海行かば」と「愛国行進曲」	116
千人針	119
慰問袋	121
国防献金	122
文士の従軍	124

映画法	126
戦争映画	127
ニュース映画	128
「週報」「写真週報」	129
友田恭助	131
《荣誉の行方》	
論功行賞	133
慰霊祭	137
軍事保護院	141
帰還兵	143
太田慶一	146
《ぜいたくは敵だ》	
国民精神総動員	151
防空演習	152
警戒警報	153
非常時下の子ら	154
銃後の覚悟	156
戦時インフレ	157
戦時税	157
郵便料金の値上げ	157
経済統制	158
国家総動員法	158
切符制	160
金の供出	162

興亜奉公日	164
バーマネット排撃	164
口を噤む	167
《生活の周辺》	
職を求めて	170
杉本良吉・岡田嘉子越境事件	172
反英運動	174
戦時下の学生	174
双葉山七〇連勝成らず	177
特急・鷗	177
半島人	178
大陸の花嫁	180
満蒙開拓青少年義勇軍	180
「神風」号訪欧飛行	181
ヘレン・ケラー来日	182
《ひそかな抵抗》	
軍部の発言権	183
機械化軍備	184
大学の自由	184
メーデー	186
近衛内閣総辞職	186
人民戦線事件	190
河上肇	191
《仕事の歌》	

労働条件と労働災害	192
秘密工場	194
軍需工業動員法	196
産業報国運動	198
国民徴用令	200
戦時下の教師	207
欠食児童	208
軍需景気	210
工員の日給	212
《農村の日々》	
戦争と農村	214
農地調整法	216
米と肥料の統制	218
《病み臥して》	
明石海人と「白描」	242
ハンセン氏病の治療対策	245
国民健康保険法	247
《四季のうつろい》	
『高千穂峯』	270
《折々の歌》	
『黒檜ひろ』	292
『大和』	294

◆凡例

1 本全集は、昭和元年から五十年までの間に

つくられた短歌を対象として、一般投稿歌、依頼出詠歌、各種資料からの発掘歌等々を、選者の選をへて編纂した。

2 収録作品は、作歌年（作者本人の申告もしくは初出掲載誌発刊年等）によって分類し、年代順に巻分けを行なった。

3 各巻内は、作品のテーマ、素材により分類・配列した。また分類ごとに初出作品の

上段に、色刷で編集小見出をつけた。

4 作者名の下に、生（没）年、出典、小題等を必要に応じてつけた。

・収録作者全員の作者略歴・索引を巻末につけた。

・生年または現存（没年）が未詳の場合は……で示した。

【例】大8：「生年のみ判明」
……昭20〈没年のみ判明〉

・出典は、原則として編纂部が典拠としたものを示した。『』は歌集、『』は新聞・雑誌などを、また（ ）内の数字は、

刊行年、刊行年月（日）号を示す。

【例】「形相」（23）〈昭和二十三年刊〉
「アララギ」（17・2）〈雑誌「アララギ」昭和十七年二月号〉

「朝日新聞」（17・12・8）〈昭和十七年十二月八日号〉

・二首以上の収録作品で、出典が複数となっている場合の表示。

【例】「アララギ」（17・9、10）〈九月号と十月号〉
「アララギ」（17・9） Ⅱ 三首（18、

3）Ⅱ 二首〈十七年九月号から三首、

十八年三月号から二首〉

・必要に応じて、出典の下に原典につけられた小題を付した。

【例】「露原」（22）——「食生活」〈歌集「露原」にある「食生活」という小題のついた一連からの抄出〉

・必要に応じて、作歌時の所在地、未発表の典拠等をへゝ内に記した。

【例】「北支にて」（日記より）
（沖修二）「阿南惟幾伝」（45）より

5 作品の表記は、よみがな（ルビ）をふくめて、旧かな使いを原則とした。よみがなは編纂部の判断で、必要に応じて加減した。漢字は新字体使用を原則とした。

6 作品の下段に色刷で脚注欄を置いた。

・昭和史事項、短歌史事項の解説脚注は、太字（ゴチック体）で見出をつけた。なお（ ）内は執筆者名。

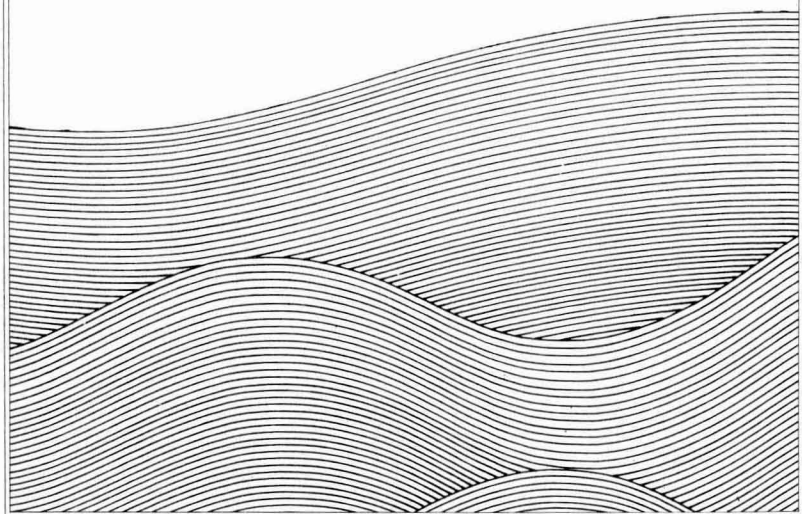
・作品中の難解語、特殊用語、古語、誤解を生じやすい語などに語注をつけた。

・収録作品につけられていた詞書は、必要に応じて、「詞書」と頭につけて脚注欄に引用記載した。

・検索しやすいように、作品の末尾と該当する脚注の頭に、*または**をくりかえし付して、対応させた。

■ 本巻収録の作品の作者・著作権者で、所在不明等のため、連絡のとれない方があります。巻末作者略歴・索引の*印を付した作者がこれに該当しますが、お心あたりの方は、編纂部まで御一報くださいますようお願いいたします。

I



大陸の戦火

荒川左千代 明35〜昭23 「アララギ」(12・9)

北支の銃声

歌謡曲のなかばに臨時ニュースありて北支に兵が立ちゆくと云ふ

福田栄一 明42〜昭50 「日本短歌」(12・10) 『時間』(18) 三首

事変ニュースのラジオひびける道の上を足かく踏み我は歩みぬ

山の方^{かた}に雷鳴りてゐむ臨時ニュース告げをるラジオにひびき入り来つ

人狙ひ打ちたる銃の弾道はわがうちふるふ胸に赤く見ゆ

しばらくの間歩みをれども事変ニュースわが前に後^{うしろ}にひびきをりつつ

岡本精一 「アララギ」(12・9)

霧深き夜の公園に北支事変のラジオニュースききつつ通る*

高木園子 明36〜 「アララギ」(12・10)

とだえゐし機関銃の音たちま^{かはし}ちに河岸近くまた起りけり

まちかくを音たてて飛ぶ弾丸におのづから心定りにけり

大陸の戦火 昭和十二年七月七日夜、北平（現在の北京）郊外蘆溝橋畔に起こった衝突事件は、対中国侵略戦争の口火となり、「北支事変」から「支那事変」へと戦火は急速にひろがった。政府・軍部は、これを「戦争」とは呼ばなかったが、まぎれもない全面戦争であった。義和団事件以後駐兵権を獲得した日本軍は、華北に約二〇〇〇の兵力をおいていたが、十一年これを約四〇〇〇に増加した。日本はすでに華北を中央から分離して、中国東北と同様日本の支配下におくための工作を進め、兵力増強もその線に沿って実現した。その一方で、中国の排日抗日の世論も高まっていた。蘆溝橋事件はこうした日本の華北侵略を戦争に拡大する契機となり、同時に日中間の全面戦争となったのである。（原田勝正）

*北支事変 政府は七月十一日この事件を北支事変と呼ぶことを決定し、九月二日に支那事変と改称。のち昭和十六年十二月十二日、対米英戦争開始に伴い、閣議で「支那事変を含め大東亜戦争と呼ぶ」ことを決定した。この時点で政府は、この「事変」を戦争と認めた。

やや低く下ると見えし飛行機より落す爆弾がさだかに見ゆる

国吉郁子 明42… 合同歌集『支那事変歌集（アララギ年刊）』（15）

床の上に心を決めて坐りたり小止みなき流弾の飛び過ぐる音

国吉国志 明38… 『アララギ』（12・10）

屋根の上を銃丸うなり飛びゆくを電燈消して吾はききをり

「水が無くなるぞ」と叫びつつオートバイに乗れる警官めぐる

後藤岩男 明37…

銃声にまじり轟く迫撃砲ただごとならぬひびきとなりぬ

軍用列車まじぐらにすぎぬ待避線の我が汽車の辺は野の花咲けり

竹村 豊 明45… 『国民文学』（13・1）

崩れ残る城壁の下に歩み来て砲弾の破片をひろひもちたり

背中より受けたる弾にたふれゐる支那の兵士は二十歳をすぎず

臼井史郎 明30… 昭28 『アララギ』（12・10）

幾度か誰何受けつつあか錆びしレールの上を歩みつづけぬ

蘆溝橋事件 昭和十二年七月七日夜、北平南西の豊台に駐屯する支那駐屯歩兵第一連隊（連隊長牟田口廉也大佐）第三大隊第八中隊が

豊台の西を流れる永定河にかかる蘆溝橋の北、竜王廟付近で演習を実施した。午後十時半ごろ日本軍仮設敵の軽機関銃空砲射撃に対し、小銃弾数発が発射された。中隊長清水節郎大尉は感じた。中隊を集合させると兵一名が欠けていた。この兵は用便中で二〇分後に復帰したが、中隊長はただちに大隊長に射撃を受けたことと、兵一名の行方不明を報告、大隊長は連隊長から命令を受けて大隊主力を出動させ、八日松曉付近の中国軍と戦闘をまじえて永定河の堤防に進出した。八日午後には連隊長も現地で戦闘を指揮した。八日夕刻北平で特務機関長松井久太郎大佐、駐在武官今井武夫少佐らが冀察政務委員会代表と交渉し、九日午前五時停戦に合意した。この事件は、発砲の真偽、また発砲者が誰かなど現在も謎に包まれている。（原田）

*待避線＝停車場構内で、他の列車の通過などを待つ列車のために設けられている線路。

盛田武男 「アララギ」(12・11)

夕早く事務打ちりて通州にたふれし社員の遺骨出迎ふ

飯岡幸吉 明31、昭48 「アララギ」(13・2)

わけありて通州に住みてをりし友は虐殺されて骨もなかりき

柴谷武之祐 明41 「アララギ」(12・10)

引揚船のデッキに二夜身をおきしと汚れし毛布さげてかへりぬ

床下に書類を埋め来りしのみ何残すなき掠奪にあふ

戸も窓も釘づけにしてひそみあつつ食^{しよく}尽きはてし時の感情を語りぬ

なが年の商権はむなしくなりしかどわが弟のかへり来にける*

青島^{うんたを}にくらしつづけし弟が帰りにたりてわれとおきふす**

内山正良 大4 「こゝろ」(14・2、10)

目に^た顕ちて砂吹き上ぐる風昏^{くら}し船はいまだも兵吐きやまず*

敵弾があげし土煙うすれゆきて向日葵^{ひまわり}の輪郭がまなこに入り来

森田 勇 明45 「心の花」(14・1)

日中戦争開始 七月八日蘆溝橋事件の報告を受けると、東京の陸軍中央部は强硬派・慎重派に意見が二分した。前者は参謀本部作戦課、支那課、陸軍省軍事課、後者は参謀本部戦争指導課、陸軍省軍務課で、参謀本部作戦部長石原莞爾少将は慎重派であった。前者は、この際中国に一撃を加えて中国における支配権を強化すべしという立場、後者は対ソ戦備を急とする現在、中国との戦争は不利という立場であった。関東軍、朝鮮軍ともに强硬意見を東京に送った。九日現地では停戦交渉がまとまり、十一日調印の運びとなった。しかし支那駐屯歩兵第一連隊長牟田口大佐は十日独断で竜王廟を攻撃した。国内でも强硬派が首脳部を突き上げ、十日参謀本部は兵力派遣を内定、十一日閣議は了承した。(原田)

*商権Ⅱその地域で商売をする権利。営業権。

*青島Ⅱ中国山東省、山東半島の南岸にある港湾都市。
おきふすⅡ生活をする。

*目に顕ちてⅡいちじるしく。

連日をいねず闘ひて今宵また行軍す我は睡りつつ歩く

西沢昱道 明38 「短歌研究」(13・2)

肌に着く濡襦袢裂き銃の泥濘拭ひてはわれも狙ひ撃ちにけり*

振り翳すわが軍刀に手向はず背円めてうち伏しにけり

銃剣構へわめき刃向ふ兵四人たくましかれば斬りて斃しぬ

友の血にくれなる染みし綿の実を形見とち切りて敵に迫りつ*

大場鎮今し乗取るに亡き戦友らわが先にわれの後につきてゐますべし*

石川 清 明39 「合同歌集」『支那事变歌集(戦地篇)』(13)

傷つける友を憂ひしは暫しにて泥濘をひたに馬曳き進む

赤々と大場鎮の燃ゆる火の幾夜か見えて今日落ちにけり

屍は避けむと思へ疲れゐて馬も踏みゆき我も踏みゆく

かたはらの死骸は誰も見て知れど焚火かこみて言ふものもなし

三田澤人 明27「昭41」『短歌研究』(13・6)

うらがなし仏の像もたたかひの弾丸にあたりて散りばひたまふ

*襦袢に肌膚。シャツ。軍隊ではシャツのことを襦袢と称した。

*綿の実。綿の木の実。苞につつまれた卵形、熟すと三つ五裂して白色の綿毛を密生した種子を露出する。

*大場鎮。上海の北にあたり南北に走る走馬塘クリークに面した街。松井軍司令官は、十月八日から総攻撃を開始したが、大損害をうけた。十月二十六日、第三師団の第十八連隊(豊橋)が占領し、上海攻略のきっかけがつけられた。

通州事件 七月二十八日日本軍は中国軍に対する攻撃を開始、北平城内の第二十九軍は二十九日までに撤退した。しかし同日午前二時第二十九軍軍長宋哲元の命令で冀察政務委員会の保安隊が各地で蜂起、天津では天津保安隊と第三十八師の一部約一万の兵力が日本軍に攻撃を加えた。北平東方数の通州は日本の傀儡政権であった冀東防共自治政府の所在地であったが、ここでも保安隊が蜂起、政府長官殷汝耕を拉致し、特務機関長細木繁中佐以下在留邦人三八〇名中約二六〇名が惨殺された。日本軍は三十日増援隊を送って保安隊を撃退、市内を占領した。(原田)

クリークを果して越えし兵なるか落ちて泥漬^{ひぢ}ちぬ鉄兜いくつ *

山野弥三郎 「創作」(13・9)

昨日落ちし大場鎮の空高く着弾観測の気球あがり *

堀江 堅 明33 昭52 合同歌集『支那事变歌集(戦地篇)』(13) 『戦塵』(18) 二首

敵弾はうなり飛び来てみはるかす水田の面^{おもて}に水煙あぐ

鉄舟に打ち伏しゐつつ神を念ず渡河し終るまでは神よ守らせ *

敵弾のしげきはものの数ならずこの泥潭^{いまいま}の糞忌々し

石毛 源 明39 合同歌集『支那事变歌集(戦地篇)』(13) 『江南戦線』(14) 二首

五步宛^{ごぽ}の距離とりて渡れしからずば支ふる兵が死すと叫びをり

頭と足をもちて運ばるる工兵の腰よりとけし千人針あはれ *

谷川に口つけ飲めばあごひげにこびりつきたる血のとけて臭^{くさ}ふ

中山隆祐 明38 昭52 合同歌集『支那事变歌集(戦地篇)』(13)

船なべて燈火^{とうくわ}つつみてすすむ夜半^よマストにあたる風音きびし

小島貞雄 明41 『瀧ノ入』(44)

*クリーク 大陸の平野部を流れる運河。農業、交通用の水路。

泥漬^{ひぢ}ちぬ 泥水にまみれ汚れた。

*着弾観測の気球 地上と連絡をとりつつ敵状と着弾を観測し、砲兵に目標を指示するための気球。

*鉄舟 軍隊で渡河や敵前上陸のために用いる鉄製平底の小舟。

*千人針 白布に千人の女性が赤糸で千の縫玉をつけ、出征兵士に武運長久を祈って贈った。とくに、この縫玉に、五銭・十銭の穴あき貨幣を縫いつける習慣があった。

五銭は死線を、十銭は苦戦をこえるという寓意である。

上海・杭州戦線 上海の海軍特別陸戦隊は四五〇〇の兵力で中国軍と交戦、これを救うために陸軍の派遣兵力第三、十一師団は先遣部隊を軍艦で輸送、八月二十三日呉淞^{わそう}、川沙鎮に上陸させた。しかし中国軍は、第九集團軍の四個師を配して防戦、トーチカとクリークで日本軍を阻止した。九月十七日日本軍は第九、十三、百一の三個師団を投入することとし、台湾からも重藤支隊を派遣した。しかし中国軍は兵力を増強、総兵力は二〇個師に近く、戦意は旺盛で日本軍の攻撃は頓挫し、損害が続出